大蔵地区をテーマにしたゼミ活動の実践（2018～2021 年度）

神戸学院大学人文学部　福島 あずさ

1.　はじめに

2018 年度より、人文学部 1 年次科目「基礎演習（後期配当）」において、大蔵谷宿および大蔵海岸周辺をテーマに文献調査や現地フィールドワークを行なっている。筆者はこれを、地域の問題や課題を発見し、提案に結びつける PBL（Problem Based Learning : 課題解決型学習）型の教育プログラム作成に向けた準備段階として位置付けており、まずは当該地域の「課題」としてどのようなことが挙げられるのか、それに対し、教育としてどのような評価を行っていくことができるのか、学生との取り組みを通じて考えることを目的に実施しているものである。

これまでの取り組みの結果、2018 年度に本演習を履修し、今年度（2021 年度）4 年次となったゼミ生 1 名が、卒業研究として大蔵谷宿の観光地化をテーマに取り上げるに至った。さらに 2020 年度および 21 年度は、テーマを「観光地化（観光振興）」に絞り、現地調査に基づいて具体的な提案を行うよう学生たちに求めたところ、ユニークな提案が集まった。そこで、これまでのゼミの活動内容についてここで小括し、報告したい。

2.　「基礎演習」の内容について

筆者は、人文学部におけるゼミのテーマとして「人と自然環境の関わりについてフィールドワーク（現地調査）を通じて考える」ことを掲げている。当該演習では、大蔵海岸に面した明石市大蔵地区（旧西国街道大蔵谷宿および大蔵海岸周辺）を取り上げ、自然環境、歴史、地域文化（祭り）などの切り口からフィールドワーク（現地調査）を行うことを一つの目的とした。対象は 1 年次生のため、まずは「フィールドに出る」ことで、研究の第一歩を踏み出すことが重要であり、現地でさまざまなことを注意深く観察し、学生一人ひとりが、地域に暮らす人々の立場に立って、課題を発見してもらいたいと考えている。履修者数は 15～17 名（/期）である。

半期のみの演習のため、現地調査は 1 回程度（2018 年度のみ 2 回実施）とし、演習の半ばごろ（11 月～12 月上旬）に設定している。それまでは文献やウェブを使った事前調査を行い、地区の現状を詳しくまとめる。現地調査後は、フィールドノートを整理し、グループワークを通じて地域の魅力と課題を挙げる。魅力の向上と課題の解決のため、他地域での成功事例をウェブ等で探し、その事例をもとに、地域への提案を行うプレゼンテーションを実施し、調査のまとめとする。

文献調査では主に、『明石の宿場』や『明石の漁村』、『明石市史』、『あかし文化遺産』とい

った明石市が発行する資料類を使っている。また市内の人口統計、国土地理院発行の地図や航空写真（おもにウェブ上で「地理院地図」を閲覧）を用い、過去から現在までの地域の歴史をたどることを重要視している。文献等から、かつて海岸で行われていた漁業の様子、江戸時代の宿場町としての賑わい、平成の大蔵海岸の大規模開発について知り、いま現地で見ることのできる景観はどのようにして形成されたのかについて理解を深める。さらに、伝統的民家が残る旧宿場町の景観の見かたを知るため、国内の他地域（重要伝統的建造物群保存地区等）の景観を例に、伝統的民家の外観の特徴（厨子二階、総二階の区別、出格子・駒寄せ・虫籠窓、瓦の葺き方等）を学び、現地で観察する際に役立ててもらうようにしている。

現地調査では、街を歩き回って事前調査で知り得たことを確認しながら、注意深く街を観察してメモを作成し、写真撮影を行う。街で出会った方や寺社仏閣などで話を聞いてもよい（ただし聞き取りは必須ではない）。当日記録した内容は、後日のゼミで時系列にまとめてWordファイルに清書し、それぞれが考えたことを追記して、フィールドノートという形で個別に提出する。

後半は、フィールドノートを手元に置きながら、グループ内でディスカッションし、現地調査で感じた魅力や観光地化にあたって課題となるであろう点を整理する。大きなポイントを整理したら、それに応じて解決策や魅力向上案を考える。その際、他地域の類似の観光地等（街並みか海岸かによって異なる）について調べ、成功事例があれば、その事例に倣って提案できることがないか探る。提案内容を決めたら、ここまでの調査結果を全て総括する形で、グループごとにプレゼンテーションを準備し、発表する。発表日には各発表で質疑応答を行って議論を深め、また教員からは各発表の講評を行なって、演習全体のまとめをする。

3. 2018～2019年度の調査テーマと成果

2018、19年度は特にテーマを定めずに、事前調査で興味を持ったことについてグループごとにテーマ設定する形で進めた。教員からは、1. 町並み景観（伝統木造住宅の住みやすさや住みにくさ）、2. 地区の交通利便性や地域福祉（防災含む）の課題、3. 地区の歴史と史跡を軸にそれぞれ調査するよう助言した。なお2018年度は2回の現地調査を行い、1回目のグループと2回目のグループをシャッフルし、異なるテーマを調べたメンバーが、現地で事前調査や前回の調査での知見を共有する方式をとった（ワールドカフェ方式のアレンジ）。2019年度以降は時間の都合上、2 回の調査日程を確保することが難しくなったため、この方式は採用していない。

調査結果から、交通利便性の低さ（特に買い物できる場所が少なく、最も近い店舗でも10分程度かかること）、ハザードマップを見ると、高潮や津波等で浸水する地域であるにもかかわらず、大蔵会館の2階にしか避難場所がないことなどが指摘された。一方で、伝統的民家の格子窓の魅力や機能についての考察や、稲爪神社をはじめとする寺社仏閣から感じられる

街の歴史や伝統、大蔵海岸周辺の雰囲気の良さ（おしゃれな公園やレストラン、散歩コースとしての魅力)、といった町の魅力の気づきについての発表もあった（図 1・図 2)。

この 2 年間は学生に明確な目的意識を持たせず「現地に行ってみる」ことを主眼に置いたため､熱心な学生は伝統的民家の街並みや寺社仏閣を中心とした史跡などを熱心に見て周り、丁寧に調査結果をまとめていたが、意識に差が生じたためか、グループ内でのディスカッションが深まらず、なかには「なんとなく行っただけ」の学生も散見されたことが課題として残った。

図 1　2019 年度に学生が撮影した写真 1
（撮影者：杭田拓也、2020 年年始の稲爪神社写真展に展示、タイトル「秋」)

図 2　2019 年度に学生が撮影した写真 2
（撮影者：福本芳、2020 年年始の稲爪神社写真展に展示、タイトル「テルマエ・ロマエ」)

4.　2020～2021 年度の調査テーマと成果

2020 年度から、より目的意識を明確化するため「大蔵地区の観光地化（観光振興)」をテーマに掲げることにした。前半の事前調査の内容はあまり変わらないものの、現地調査と調査後のディスカッションやまとめについては、この目的に沿った形で議論を進めるよう指導した。するとディスカッションが大いに盛り上がり、具体的な提案がいくつも出てくるようになった。

ここで 2020 年度のあるグループの発表から、課題と提案の部分を紹介する（図 3)。

【課題】

・建物の幅が狭く、駐車場などの敷地が取りにくい

・伝統的な建物の割合が少ない

・寺や神社があるにもかかわらず、目立たない（PR 不足）

【提案】

・観光ガイドを実施する（歴史的背景を解説しながら各所をめぐる）

・VR 体験

・古地図で散策（宿場町当時の地図と見ながら現在の町を散策）
・古民家カフェを作る
・駐車場を作る（遠方の人が気軽に来られるよう）

当該グループはこれらの提案を通じ「歴史的な認知度 UP や交通の整備によって、人通りの多い街づくりを目指す！」という目標を掲げている。そして最後に「その街の人々が望んでいないと街を発展させられない」ことから、大学生が地域の方と連携して事業を行うことで、幅広い年代の意見を活かし、老若男女が訪れるまちづくりをすべきではないか、と結んだ（図4）。

図 3　2020 年度受講学生の発表スライド 1

図 4　2020 年度受講学生の発表スライド 2

このグループの掲げた問題点と提案は非常に明確で、また地域住民の意思が何より重要であるという点を指摘するなど、すぐにでも地域と連携を始められそうなプロジェクトとなっている。他にも、稲爪神社に QR コードを設置してお祭りの様子をいつでも動画や写真で見られるようにしたらどうか、という提案があり、大学生ならではの視点で自由に提案させることで、地域に対して画期的な提案を行うことができる可能性が示唆された。

2021 年度は同じテーマを引き継ぎつつ、提案の際、他の地域の事例（先行事例）を必ず提示するよう指導した。ここでも大蔵谷宿の街並みを活かした観光地化について提案を行ったグループから課題と提案を紹介する（図 5・図 6）。

【課題】
・住宅街の中にあるため観光地化しにくい
・飲食店がない
・街灯が少ない
・案内する看板がない
・古い町並みが完全な形で残っていない
・他の宿場町に比べて知名度が低い
・新しく建てられた家やマンションが目についてしまう

【提案】

・飲食店がないことへの解決案

→古民家の雰囲気を活かしたカフェ、食事処で外部からの観光客を呼ぶ

先行事例：東京都板橋区にある「板五米店」

（中山道板橋宿にある商家（大正 3 年建築）で区の有形文化財に登録。建物の老朽化が進んでいたが、2020 年まちづくり拠点として整備され、１階を観光案内所や板橋宿の歴史を紹介するギャラリーに、２階をワークスペースにして地域に解放している。）

・知名度が低いことへの解決案

→宿泊施設として場所を提供したり、SNS を利用して大蔵谷地区の魅力を発信する。

先行事例：新潟県三条市にあるアトリエ付き滞在施設「Craftsmen‘s Inn KAJI」

（築 80 年の古民家を改装したアトリエ付き滞在施設で、1 階の土間スペースはカフェ、2 階は 1 日 1 組限定の宿泊施設となっている。Instagram で積極的に写真を投稿し、予約状況などの発信を行なっている。訪れた人からの投稿が宣伝になっている。）

・街灯が少ないことへの解決案

→古民家や街道沿いに街灯を設置する。兵庫県の伝統工芸である和ろうそくを使ってはどうか。

先行事例：長野県塩尻市の「奈良井宿アイスキャンドル祭り」

（古い町並みに、約 2,000 個の手作りアイスキャンドルに火が灯され、幻想的な景色が拡がっている。）

・案内する看板がないことへの解決案

→大蔵地区の地図、観光マップ、案内する看板を設置

先行事例：大阪府・奈良県「日本遺産　竹内街道・横大路」の「緑の一里塚」

（木材を利用した案内看板を整備。設置箇所：大阪府松原市営住宅地内、難波宮跡公園内、大道沿線の道路敷地）

当該グループは、メンバーが一つずつ現地調査で発見した課題を挙げ、それについての解決案を先行事例から探して提案する形で発表を行った。ユニークだったのは、和ろうそくを使った街灯をイベント化するアイディアである。そもそも「街灯が少ない」というのは街の賑わいに直結する問題である一方、日中の調査ではよく観察していないと気づきにくい点であり、さらにそれを地場産品と結びつけてイベント化しよう、という発想も柔軟である。他のグループからは、旧中山道の宿場町のように街路に石畳を敷き詰めて、江戸時代の風情を味わいながら街歩きができるような景観整備や、電柱の地下化、地域の郷土資料等を閲覧でき

るセンターの設置、観光マップの作成（明石駅前観光案内所に置いて大蔵谷まで誘致）、伝統技術の体験ができる施設の設置（そこでしかできない体験を提供）などの提案があった。

このように、大蔵谷宿は学生からすると「たくさんの魅力が眠っているのに、なぜ活かされていないんだろう」と感じるようである。狭い路地に入ってみたり、地域猫に遭遇したり、ゆったりと流れる時間に癒されるなど、普段感じられない魅力をたっぷりと感じた、という感想が毎年聞かれた。

また、ここでは取り上げなかったが、大蔵海岸に関する提案としても、魚をすぐに捌いて食べることができる飲食店の招致や、淡路島をサイクリングで一周する「アワイチ」とタイアップさせた観光振興など、ユニークなアイディアがいくつも挙がった。

図 5　2021 年度受講学生の発表スライド 1

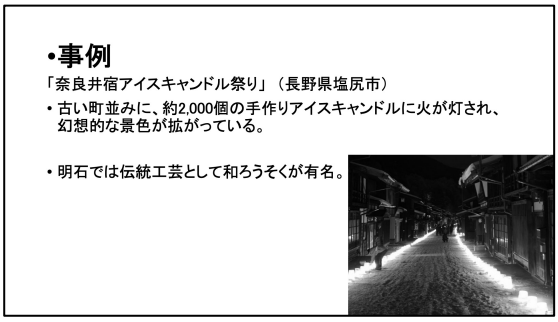

図 6　2021 年度受講学生の発表スライド 2

5.　2021 年度卒業研究の紹介

2018 年度に基礎演習を履修した学生の一人が、この地域の観光振興をテーマに研究したいと希望してゼミに入り、2021 年度に卒業研究を実施した。本節ではその内容を紹介する。

今年度研究に取り組んだ江島優貴さんは、基礎演習を履修した 1 年次生の頃から大蔵地区の歴史に関心を持ち、文献調査では明石市史を丁寧にまとめ上げ、現地調査では稲爪神社のお祭りに関心を寄せていた。3 年次生になって卒業研究のテーマにもこの地域を取り上げたいと希望し、特に歴史的資源を活かした観光振興に関心を持ったという。

当該研究の大きな特色は、大蔵谷宿と丹波篠山市に残る篠山街道（西京街道）の福住宿を対比させ、その街並み景観の違いや、観光振興のためのこれまでの取り組み等を整理し、大蔵谷宿の観光地化に向けた展望に結びつけている点にある。論文の章立ては以下のようになっている。

第 1 章　はじめに
　1-1. 研究背景
　1-2. 明石市大蔵地区の概要・現状
　1-3. 明石市大蔵谷の歴史的背景
　1-4. 大蔵谷の無形民俗文化財
　1-5. 稲爪神社と越智益躬について

第 2 章　研究方法
第 3 章　丹波篠山市福住地区の町並みと現状
3-1. 丹波篠山市福住地区について
3-2. 福住地区での現地調査
3-3. 町並み保存・まちづくりについて
3-4. 丹波篠山市福住地区 市の役割と伝建地区保存の取り組みについて
第 4 章　大蔵地区における調査結果
4-1. 明石市の町並み保存・まちづくりに関する取り組み
4-2. 大蔵地区・明石フィールドワーク
4-3. 明石市の観光の現状
第 5 章　考察
5-1. 伝統的建造物を活かしたまちづくりに関する福住地区と大蔵地区の比較
5-2. 伝統的建造物を活かした観光振興
5-3. 大蔵地区の歴史的資源を活かした観光振興
5-4. 明石の観光振興を推進するために
第 6 章　おわりに
参考文献

比較対象とした丹波篠山市の福住地区は、2012 年 12 月に国の重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）に指定されており、観光地としてはまだそこまで知名度が高くないものの、大阪方面からの移住者や、古民家ホテル「福住宿場町ホテル NIPPONIA」の開業などで話題を集める地区である。なぜこの地区が宿場町を活かした観光地化に成功しているのか。江島さんの調べによれば、篠山市教育委員会を中心に 2000 年代後半から、重伝建地区登録の前段階となる、伝統的建造物群保存地区への登録を目的として、古民家の保存活動を活発化させていたことがわかった。福住地区の自治会長に呼びかけを行い、2007 年に福住地区伝統的建造物群対策委員会を設置、2 年にわたり福住地区伝統的建造物群保存対策調査を実施したという。2008 年には教育委員会が住民（対象地域が 8 地区にまたがるため、8 ヶ所で実施）を対象に街並み保存説明会を開催している。

なお篠山市では 2004 年に篠山城下町の重伝建地区登録を実現しており、登録決定直後から、福住地区の登録に向けて動いてきたことがわかる。もともと兵庫県内では、神戸市北野の洋館群が 1980 年に登録されたものの、重伝建地区登録を目指す自治体はなく、篠山市は先駆的な役割を果たした自治体といえる（2022 年 2 月現在も、兵庫県内の重伝建地区は 6 ヶ所にとどまる）。

福住地区では、街道沿いに旧宿場町を進むと、神社（住吉神社）を越えたあたりから農村集落へと連続的に続き、立ち並ぶ民家の外観が変化する特徴を持つ。周囲は田園風景であり、中世の山城なども点在する。大蔵谷宿も、漁村と宿場町の双方の歴史を持っており、経緯が似通っている。また論文内で指摘されているように、双方に伝統的な祭りや民俗芸能が継承されていることも共通点として挙げられる。福住では住吉神社の水無月祭（市指定無形民俗文化財）で奉納される打込囃子（うちこみばやし）、大蔵谷では稲爪神社の例大祭とそこで奉納される獅子舞（県指定無形民俗文化財）、囃口（はやくち）流し、牛乗り神事（いずれも市指定無形民俗文化財）である。こういった地域の伝統民俗芸能は、地域に住む人々の誇りや

コミュニティの維持に欠かせないが、その継続的活動においては困難を伴うのも現状である。丹波篠山市では、このような民俗芸能の継続のための支援にも力を入れているという。

一方で明石市においては、市としてよりも地域の自治組織等のコミュニティに任せている側面が強く、「協働のまちづくり推進組織」の仲介役を担うという立場を主張している。これはどちらかといえば、地域住民が住みやすい環境や防災、教育などの充実を求めて行う活動で、文化財としての街並み保全や、伝統民俗芸能の市外への発信といったことはあまり想定されていないとみられる。また観光に関しては、明石観光協会（一般社団法人）を中心にプロモーション活動を行なっているが、明石駅前の観光案内所、専用のウェブサイトともに、大蔵谷宿についての言及がみられない。江島さんが明石市に対して行なった聞き取り調査によれば、地域の歴史に関する発信は明石市立文化博物館で行っている、とのことで、2021 年末にも「明石の古道と駅・宿」という企画展を実施していたという。

このような現状を踏まえ、当該論文では、住民同士の協働や住民主体の活動が身を結んだ結果、福住地区は観光地としての知名度を上げて成功しつつあるのに対し、明石市ではそのような動きが見られないことから、まずは市と住民が連携する体制づくりからはじめてはどうか、と提言している。地域に残る伝統的民家や伝統民俗芸能を末長く保存し、歴史文化遺産を活かしたまちづくりや観光振興を行うことで、地域の人々がその魅力を後世に語りづいていくことにもつながるのではないか、と主張している。

なお、当該論文の問題点として、本当に福住地区では「住民主体」の活動によってまちづくりが推進されたきたのかという点について十分な調査（特に当事者への聞き取り等）ができていないこと、大蔵谷についても伝統的民家の所有者が直面する課題や、今後の街に対する展望（観光地として地域の魅力をアピールすることに住民が肯定的なのか）についての調査が不十分であることが挙げられる。「誰が」、「何をしたら」、「どうなったのか」という経緯を詳細に明らかにするためには、現地での詳細な聞き取り等が必要だったが、コロナ禍という壁もあり、それが実施されなかったことは多少残念である。しかし、2 つの地区を対比しつつ、大蔵地区の課題を抽出することができたという点で、大いに成果はあったいえる。

当該論文の成果については、2022 年 2 月に行われる予定の、あかし教育研修センター社会科研修講座主催の勉強会（明石市内の小学校教員らが参加）「大蔵谷宿の交流会」において、発表させていただく予定である。

最後に、当該論文の要旨を掲載する。

明石市大蔵地区の観光地化を考える～丹波篠山市福住地区と比較して～

江島 優貴

本研究では、兵庫県明石市の大蔵地区を対象とし、歴史的資源を活かした観光地化やまちづくりについて考察を行った。歴史的資源の 1 つとして、大蔵地区には明

石市の都市景観形成重要建造物に指定された町屋が現存する。しかし、都市化が進むにつれて、取り壊しや外観工事が次々と行われ、伝統工法で建てられた木造町屋の数が減少していることが既存の研究で指摘されている。大蔵地区が魅力ある町として発展するために、町屋などの伝統的建造物やその他の歴史文化遺産を観光資源として活かすことができないかと考えたことが本研究の動機である。

研究方法として、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている丹波篠山市福住地区を参考事例とし、文献調査、現地調査、市役所等への聞き取り調査を行った。2つの地区を比較しつつ、大蔵地区を観光地化するために必要なことは何かということについて考察を行った。

丹波篠山市福住地区は江戸時代の宿場町の景観が維持されており、地区内には古民家を活用した飲食店やホテルがある。また、福住地区のまちづくりは教育委員会が主体となって行われ、住民と深い連携を取っている。古民家を中心とした町並み保存の活動は 2007 年から行われ、その後は地元住民で組織された町並み保存会などの団体が市や教育委員会と連携をし、「まちづくり勉強会」やワークショップなどの取り組みを行ってきた。

一方で、大蔵地区は市がまちづくりの活動を計画してはいるが、なかなか実行に移すことができていない。明石市の活動として明石市都市景観条例などの条例を施行することで住民に協働の呼びかけをしてきたが、福住地区と違い、大蔵地区では住民を主体とした活動がほとんど行われておらず、大蔵地区のまちづくりを行う体制づくりが整えられていないことが課題である。また、古い町並みを活かした古民家カフェなどの飲食店、資料館等運営の実現可能性についても 2021 年時点では深く検討されておらず、実現可能性も不明とのことである。

両地区を比較すると、まちづくりの取り組み方には大きな違いがあり、大蔵地区の今後の課題が明確となった。古民家を活用した観光振興を行うためには、大蔵地区でも教育委員会の役割をより強めていく必要があるのではないかということを考えた。大蔵地区の住民が市や観光協会に注目してもらえるような取り組みをこれからも継続していくということも重要であるが、住民同士の協働や住民主体の活動に市や教育委員会がバックアップを行う形が実現すると古民家活用により可能性が生まれる。また、古い町並みの景観について、その内容を明石市の学校教育に導入することも古民家保存やまちづくりに繋がると考えた。その他、大蔵地区の観光振興に関する提案として、稲爪神社や大蔵院などの大蔵地区に存在する歴史的遺産を活かした観光振興についても考えた。観光地化とまちづくりには住民と行政の連携が欠かせず、組織団体を通じて、まちづくりのための取り組みを行なっていく必要がある。

6. おわりに

ここまで2018年から取り組んできたフィールドワークを通じたゼミ活動を小括し、江島さんの卒業研究の成果を述べた。最後にまとめとして、本活動の成果と課題の2点を挙げたい。

まず基礎演習については、半期で地域の魅力や課題を学生が一から見つけることは当初困難であったが、一つのテーマを設定して調査を進めることで、学生の目線がはっきりし、現実的な提案が多く挙がった点が成果として挙げられる。テーマを絞れば、当該地域で何が課題なのか、その課題に対し、どのようなアプローチで解決できるのかを明確にすることができる。もし基礎演習の内容を通年で実施することができれば、現地調査ののち、地域の方への聞き取り調査等を実施してニーズを把握したり、一緒に勉強会等を開いて、ディスカッションを深めることができ、よりPBLとしての性質をはっきり持たせることができると考えられる。

課題として残るのは、1年次の基礎演習で関心を持った学生が、その後どのような科目やゼミを選択すれば、卒業研究に取り組むまでにより成長することができるのかという点である。人文学部の教員で、当該地域に関して人脈も経験も豊富な教員は多い。2年次でそれらの教員の講義やゼミを履修し、フィールドワークの技法や考え方を習得したり、明石の地誌や歴史を学ぶことができる「地域学講義」などの科目、さらに明石に関わる文学や文化を取り上げる科目などを履修することで、より深い学びにつながると考えられる。しかし現状では学生は、それらを「自分で見つけ」て履修するしかないため、適切に履修できる可能性は低い。そこで今後、それらの情報を集約し、教員から「薦めて」いくことも必要ではないかと考えている。

参考文献

明石市史編さん委員会編（1999）明石市史現代編1 .93p.
明石市地域文化財普及・活用事業実行委員会・明石市（2015）あかし文化遺産-明石市内に点在する文化財を調査・解説. 94p.
明石市役所（1992）明石市史下巻（復刊）. 877p.
明石民俗文化財調査団（2016）明石の漁村-「鹿ノ背を巡る漁業とくらし」-. 95p.
明石民俗文化財調査団（2017）明石の宿場-宿場と人々のくらし-. 78p.
江島優貴（2021）明石市大蔵地区の観光地化を考える～丹波篠山市福住地区と比較して～. 2021年度神戸学院大学人文学部卒業論文. 30p.

謝辞：本研究の一部は、2018年度から2021年度までの神戸学院大学人文学部研究推進費（2018年度課題名「記憶を歴史に―明石大蔵地区における記憶継承の拠点構築にむけて」代表：早木仁成、2019・2020年度課題名「地域の記憶の継承に向けた実践的研究－神戸学院大学地域研究センター明石ハウスを拠点として－」代表：2019年度・早木仁成、2020年度・野田春美、2021年度課題名「コロナ禍における地域の記憶の継承に向けた実践的研究－地域研究センター明石ハウスを拠点として－」代表：野田春美）の助成を受けて実施された。